

ひょうごの遺跡

平成10年1月30日発行
兵庫県教育委員会
埋蔵文化財調査事務所
神戸市兵庫区荒田町2-1-5
☎652-0032 TEL 078-531-7011
FAX 078-531-7014

平成9年度発掘調査成果速報展特集

阪神・淡路大震災の復興と埋蔵文化財Ⅲ

と き：平成10年2月7日（土）～2月17日（火）

ところ：神戸クリスタルタワー5階・県民ギャラリー

この号は、平成9年度に行った発掘調査や整理作業の成果の速報展の特集号です。下の写真は、前号でもとりあげた復興調査の兵庫津遺跡（神戸市兵庫区）から出土した金属製品です。上段左の近世の小型の和鏡はつまみが亀の形をしており、鶴の模様がよくわかります。右の天保小判は非常に薄くて粗悪なので、本物かどうかわかりません。中・下段は中国から輸入された宋銭・明銭やおなじみの寛永通寶などで、他にも大量の銭が出土しています。中段の洪武通寶には大きさが少しずつ違うものがあることがわかります。こうした遺物の整理が進めば、中世から現在にいたる港町の繁栄の様子が生き生きとよみがえるでしょう。



兵庫津遺跡出土の鏡と銭類

丘の上の弥生のムラ にちりんじ 日輪寺遺跡 第4次地点（神戸市西区） ※神戸市への支援調査

日輪寺遺跡は弥生時代から中世にかけて続いている遺跡です。今回の調査は民間マンション建設に伴って行われました。遺跡の位置は明石川と植谷川はせだにの合流地点に近い丘陵上で、遠くに淡路島を望む景色のよいところです。当調査区では、弥生時代後期の住居跡と中世の土坑・建物、古墳時代前期と中世の土器溜まりを検出しました。

弥生時代後期の住居跡は、円形のものが3棟、方形のものが7棟あります。



弥生時代後期の円形竪穴住居



調査風景

最大の円形住居は調査区南東端に位置していました。直径は10.6mあり、住居内側をさらに一段掘り下げて、壁沿いにベッド状遺構と呼ばれる高床部を作っています。この住居は地山に似た赤い土でいねいに埋められていたようです。

方形の住居で最大のものは、一辺7.5mあります。やはりベッド状遺構をもっています。別の方形の住居内では、南東隅に土器を集めていたところが見つかりました。

密集する古墳時代の集落 てらだ 寺田遺跡 第95地点（芦屋市三条南町） ※芦屋市への支援調査

寺田遺跡は芦屋市の西部にあり、芦屋川と東川によって形成された扇状地上に立地する縄文時代～近世の遺跡です。これまで100回以上の調査が行われ、芦屋市内でも特に遺構が集中し、多量の遺物が出土する遺跡であることが明らかになっています。

今回調査した95地点では、弥生時代中期～中世までの4つの生活面を確認し、古墳時代前期～後期の第2生活面では15棟の竪穴住居が発見されました。住居は炉をもつもの、ベッド状遺構をもつもの、カマド付きのものなど様々な形態がみられます。



現地説明会のようす



阪神間で最古級のカマドをもつ住居

上の写真は古墳時代中期中頃のもので、阪神間で最古級のカマドをもつ住居です。カマドが確認された8棟の住居のうち7棟が住居の北側にカマドがあるのに対して、この住居のみが東南の壁際にカマドがあることが特徴です。また、第3生活面では弥生時代後期～古墳時代初めの川・谷・土器棺が発見され、多数の土器が出土しました。

これらの成果はこの付近に古墳時代を通じた集落が広がっていたことを示しています。また、11月の現地説明会には多数の見学者が集まりました。

古代の井戸と土器 みなみほんまち 南本町遺跡 (伊丹市南町)

南本町遺跡は伊丹市の南東部、猪名川の支流である藻川の西岸に広がっており、これまでも何度か調査されてきました。平成7・8年度の調査では奈良時代の建物跡群や井戸・溝跡などの他に、上部が削られ周溝のみが残された古墳や、織田信長が荒木村重を攻めた際のものと思われる「砦」の濠跡も発見されました。

今回の調査は県道尼崎港川西線（通称産業道路）の拡幅工事に伴う震災復興調査です。発掘した場所は、これまでの調査の南側にあたる部分で、調査面積は約930㎡でした。

調査の結果、方墳と思われる古墳が周溝とともに調査区の南部で発見され、6世紀の須恵器が出土しました。しかし、検出した遺構・遺物の大部分を占めるのは奈良時代のもので、今回の調査区内では建物跡は1棟だけでしたが、井戸跡や数多くの溝が発見され、多くの土器が出土しました。

井戸跡は2基ありましたが、調査区北部のものは深さ約2.5mあり底付近では木製井戸枠が残っていました。井戸枠は角材を井桁に組み、4隅の柄穴に加工した隅柱を立て、横板を積んでおり、井戸内から数多くの須恵器・土師器が出土しました。土師器は杯・皿が多く、役所跡でよくみられるものです。

井戸の組み方をみると、8年度調査区の建物跡群部分で見つかった井戸は加工した横板の隅を組み合



井戸底の遺物出土状態

わせた井籠組に積み上げたもので、今回発見した井戸よりも高度な構造であるので、遺跡の中心は今回の調査区よりも北側になると思われます。

井戸以外で注目される遺物には、「神家」と墨で書かれた須恵器や軒丸瓦の破片があります。瓦の文様は東方約500mにある猪名寺廃寺出土瓦と同じで、この寺とは大いに関係があることがうかがえます。

当時の交通は猪名川を利用した水運も行っていたと考えられ、当地方への門戸は猪名寺廃寺付近にあったと想像されますが、その近くにある整然とした建物群は寺創建の豪族「猪名氏」と密接なつながりがあり、「猪名氏」の集落、あるいはこの地域を治める役所として機能していたのかも知れません。



井戸出土遺物

150年間続いた墓地 ^{ひやま}火山古墳群 (氷上郡春日町)

北近畿豊岡自動車道の建設にともない、平成8年から調査している火山古墳群は、13基の古墳からなっています。そのうち8基(1～6・11・12号墳)は木の棺をじかに埋めた古墳(木棺直葬墳^{もっかんじきそう})で、5世紀後半から6世紀前半にかけて造られたものです。棺の中からは鉄製の武器や農具などが出土しており、墳丘に埴輪^{はにわ}をならべたものもありました。

残りの5基(7～11号墳)は石を積んで造った部屋に棺をおさめる横穴式石室をもつ古墳でした。横穴式石室は朝鮮半島から伝わったものであり、6世紀に従来の木棺直葬墳などにとってかわって大流行したものです。

火山古墳群で最初に横穴式石室を取り入れたのは6世紀中ごろの10号墳です。この古墳は石室の構造に古い特徴を残しています。これ以後、7号墳・9号墳・8号墳・11号墳の順に7世紀前半まで、一世代(約20年)ごとに古墳を造り続けています。

古墳の石室の中からは、玉をつらねた首飾りや金銀メッキした耳飾り、鉄製の刀や馬具などとともに死者に供えた多くの土器が出土しています。

火山古墳群は、5世紀後半から7世紀前半まで約150年にわたって続いた墓地です。古墳時代中期か



床に石を敷いた部分が一段低いという古い特徴をもった石室(10号墳)

ら後期にかけて、このように長い間にわたって同じ墓地を使い続けている例はめずらしく、古墳の立地や埋葬施設の移り変わりを知る上で貴重な資料を得ることができました。



古墳時代の墓地 尾根の上の10号墳が古く、下の古墳ほど新しくなります。

「ゾウ」から「シカ」へ なぬ か いち 七日市遺跡

(氷上郡春日町)

下の写真は七日市遺跡から出土した石の道具です。
左側2点は局部(刃部)磨製石斧で、ゾウなどの
大型動物を解体する時に旧石器人が使っていたよう

です。右側の6点はナイフ形石器です。旧石器人は
ヤリの先につけ、中小型のシカやイノシシの狩りを
していました。ナイフ形石器の2点(上段左・中央)

は「国府型」ナイフ形石器と
呼ばれ、25,000年以前のもの
では初めての出土例です。

局部(刃部)磨製石斧とナ
イフ形石器は同じ旧石器人が
使っていたようで、25,000年
前に降り積もった火山灰の下
で見つかりました。それまで
の伝統であった「ゾウ狩り」
から、これ以降に盛んとなっ
た「シカ狩り」への転換が読
み取れます。

(左側の石斧：長さ13cm)



鉄剣と石剣 ありはな 有鼻遺跡 (三田市けやき台)

約2,000年前の弥生時代中期後半、三田市の北摂
ニュータウンとなっている丘陵上には大きなムラが
いくつもありました。有鼻遺跡もそうした弥生のム
ラの1つです。平成7年度に震災復興調査として全
国からの専門職員の応援を得て発掘調査を実施しま
した。現在出土した遺物を整理して調査報告書を作っ
ているところです。その作業の過程で、この遺跡か
ら出土した鉄剣が畿内では最も古い時期のものであ
ることが明らかになりました。

鉄器は弥生時代の初めに中国から朝鮮半島を経て
伝えられました。弥生時代中期に入ると鉄器の1つ
として鉄剣が出現しますが、その分布は北部九州を
中心とするものでした。弥生時代後期になると鉄剣
は近畿から関東まで広範囲に分布するようになります。
これまで近畿地方で確認されている最も古い鉄
剣は、弥生時代後期に入るものでした。

有鼻遺跡出土の鉄剣は全長約23cmで短剣に分類さ
れるものです。剣の形状は右写真下の七日市遺跡で
出土している鉄剣形磨製石剣などと似ているので、
そのモデルとなったものかもしれません。北部九州

の鉄剣形磨製石剣には似た形状のものがいないので、
この鉄剣は畿内で作られた可能性も考えられます。

鉄剣出土地点の近くには有力者の住まいと推定さ
れる大型の掘立柱建物跡を検出しており、剣との関
係が注目されます。

有鼻遺跡から出土した鉄剣は弥生時代中期後半の
段階で畿内とその周辺部の有力なムラが力の象徴と
して剣を所有していたことを物語る貴重な資料とな
ります。



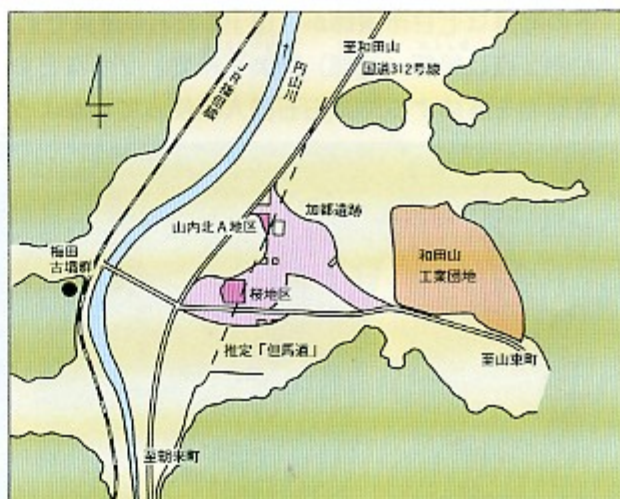
古代但馬道を発見 ^{かつ}加都遺跡 (朝来郡和田山町)

加都遺跡は、「加都千石」とよばれる和田山町内最大の平地にあります。この地に計画された播但連絡道路のインターチェンジ建設に先立って、約55,000㎡の全面調査を今年度より開始し、半分が終了しました。

今年度実施した9ヶ所の調査成果は貴重なものばかりですが、特に注目されるのは、桜地区・山内北地区でみつかった道路遺構です。

両地区にまたがって、奈良時代から平安時代初頭頃に作られた一本の道路遺構がみつかりました。途中の調査区外を含め、両地区で長さ約450mが確認されました。この道路の特徴は、路面の最大幅が約7mととても広いことと、南北両側の山裾を目印にして、一直線に伸びていることです。また、直線的に作ることを第一目標にしたため、土地の条件によって施工方法を変える必要があったようです。谷部に位置する山内北地区では、厚さ約50cmの盛り土で道路を造成し、崩れないように、その表面に石を貼りつけていました。これに対して、より高い場所にある桜地区では、東西両側に側溝を掘った簡単な構造のものでした。

この道は、平安時代末頃までには円山川の洪水による土で埋まっていることが、桜地区の調査で確かめられました。桜地区には、鎌倉時代頃に合計37棟



の掘立柱建物等からなる村が営まれていることがわかりましたが、その頃この道が場所を変えて作り直されたかどうかははっきりしません。

この道路は先に述べた2つの特徴から、奈良時代に国が都と地方との連絡を密にするために整備した公の道の一部と考えられます。この頃、諸国と都を結ぶ交通制度が整備されますが、加都遺跡で見つかった道路は、山陽道と山陰道という二つの主要な官道を結ぶ「但馬道」と呼ぶべき道である可能性が極めて高いと考えられます。険しい山陰道为了避免、中央からの命令や地方からの報告を携えた役人等が、この道を頻りに利用したと思われます。



桜地区の道路遺構



山内北地区の貼り石のある道路遺構

かたぶ ついじ こいぬまる
瓦葺きの築地跡 小犬丸遺跡 (龍野市揖西町)

小犬丸遺跡のある東西に細長い谷には、奈良時代最大の官道である古代山陽道が通っていました。以前に行われたこの遺跡の調査で、布勢駅家跡が発見されています。駅家とは古代の官道に約10～15kmごとに設けられた駅馬の中継所です。山陽道の駅家は瓦葺き建物から成り、大陸の外交使節などが乗ってきた馬を乗り換えたり、休息や宿泊に利用しました。

今回、駅家から西へ約700m離れた場所で山陽自動車道新宮インターチェンジ建設に先立ち調査を行ったところ、瓦葺きの築地跡を発見しました。

築地とは、土をつき固めて積み上げる作業を繰り返して築いた塀です。雨などで水が溜まったとき塀の根元が崩されないよう両側に排水のための溝を掘ってあります。築地本体は削られて残っていませんでしたが、両側の側溝とその中に落ち込んだ大量の瓦が発見されました。瓦はほとんどが丸瓦と平瓦で、軒丸瓦・軒平瓦はわずかに2点ずつしか出土していません。丸瓦は全て、重ね合わせるための段を持たない無段式(行基葺式)のものをしています。

築地の方向は東西南北にはほぼ一致し、東西約22m南北約30mにわたり、南西角に相当する部分を検出しています。築地はさらに調査範囲外へと続きますが、北側に山が迫る地形的な制約もあり、もともとは80m四方程度の規模であったと推測できます。

この築地は、7世紀の終わりから8世紀の初め頃に建てられたと考えられ、10世紀頃には完全にすた



排水溝の中から出土した軒丸瓦

れて埋没したようです。この新発見の瓦葺き施設が存続する時期は布勢駅家と一部重なっており、地方の小さな郷の中に2つも瓦葺き建物を持つ施設が同時に併存していたことになります。築地に囲まれた範囲からは、この建物の性格の確証は得られませんが、この時期に瓦を用いていることから寺院と考えてよいでしょう。もちろん近くには布勢駅家があり、駅家に関連する施設であることも完全には否定できませんが、現時点では在地有力者の氏寺であったと考えています。

今回の発見で、国の官衙施設と在地有力者の氏寺が同じ郷の中に併存していることが明らかになりました。布勢駅家の経営維持は、駅家成立以前からこの地にいた有力者が任されて行うようになったと考えられます。見つかった築地跡が、「布勢駅長一族の氏寺の築地」であれば、古代の地方有力者と国との関係を示す貴重な発見といえます。



築地跡の調査風景

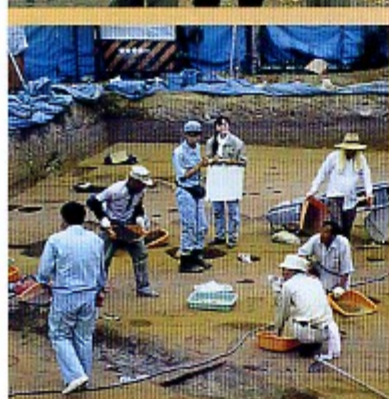
縄文土器を復元する

埋蔵文化財調査事務所では、遺跡で発掘された土器や石器・木器や金属製品の整理作業を日々行っています。扱うものの時代は古代・中世を中心に、弥生時代以降のものが大多数で、縄文時代の遺物に触れる機会は余りありませんでした。

城崎郡日高町の山宮遺跡からは、今から8,000年前の縄文時代早期の高山寺式の土器などが出土しました。見慣れぬ土器に苦勞しながら小さな破片を根気よく接合し続け、とうとう復元することができました。右の写真がその土器です。近畿地方では、この時期のこのように残りのよい土器は珍しく、大変貴重な資料です。



復興調査に取り組む人々



編集後記

- ◇『ひょうごの遺跡』は多くの職員の協力のもとに原稿を集め、編集作業を行っています。それぞれの原文の個性を生かしつつ、全体の統一がとれればと思うのですが、なかなか難しい作業です。
- ◇冬の寒さとともに、あの震災に続く日々のことを思い出します。でも冬来たりなば春遠からじ。やがて必ず復興と再生の春が訪れることでしょう。

